

## 保育実習 I における評価についての一考察

長谷 秀揮 \*

A Study of evaluation of the students' learning in child care and education training I

Hideki Hase

本稿の目的は、保育実習における評価について着目し、実習生に対する保育所からの評価及び実習生の自己評価を分析し、比較検討することにより、本学の学生の保育所実習における課題や問題点等を明らかにすること、そして実習指導の内容と質の充実に繋げていくことである。具体的には、実習生に対する保育実習 I についての実習園からの総合評価及び項目ごとの評価を直近 3 年間について整理分析して考察を加え、また事後指導で作成した実習生による自己評価と比較検討することにより、本学学生の実習における課題や問題点を明らかにし、保育実践能力の向上への取り組みについての方向性や展望を探ることであり、ひいては保育実習指導 I の授業並びに、事前及び事後指導の一層の充実と改善向上に繋げ、さらにはそのより良い在り方を探ることに資することである。

**Key words:** 保育実習成績評価票、総合評価、項目評価、自己評価

## 1. はじめに

保育実習の目的は、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知により、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」（保育実習実施基準 第 1 保育実習の目的 平成 15 年 12 月 9 日）とされている。そして保育の現場を借りて養成校が現場の保育者に教育を委託する形で行われ、学生が保育の実際を体験的に学ぶ機会であると、位置づけられているのである。

また、その保育実習の評価については、同じく厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知の保育実習実施基準（平成 24 年改訂）では、「5 指定保育士養成施設の所長は、毎学年度の初めに実習施設その他の関係者と協議を行い、その学年度の保育実習計画を策定するものとし、この計画には、全体の方針、実習の段階、内容、施設別の期間、時間数、学生の数、実習前後の学習に対する指導方法、実習の記録、評価の方法等が明らかにされなければ

ならないものとする。」とされている。また通知の中の別の項目において、例えば「記録に基づく省察・自己評価」（保育実習 I <保育所実習の内容> 4. 保育の計画、観察、記録の（2））と、記述されていたり、「作成した指導計画に基づく保育実践と評価」（保育実習 II <内容> 4. 指導計画の作成、実践、観察、記録、評価）というように記述されていたりして、主に実習生の振り返りと自己評価に関する記述はなされている。しかし、通知には保育実習の評価に関しての具体的な記述や規定はなく、評価の観点についても特段の定めはない。毎年度の初めに評価の方法等について養成校の長が定めることと、明示しているが実際のところは実習及び実習生の評価に関しては、その具体的な基準や評価の方法等について各養成校に委ねられているのが現状であるといえよう。

そのような中で全国保育士養成協議会が平成 19 年に刊行した「保育実習指導のミニマムスタンダード 現場と養成校が協働して保育士を育てる」の中では、第 6 章全部を「実習評価」に充て実習評価の考え方や評価の手続き、そして具体的な実習評価票についても参考として提示していて、全国の保育士養成校の参考となる様に、具体的かつ詳

\* 四條畷学園短期大学 保育学科

細に論述し説明が加えられている。そこでは評価については、いわゆる“PDCAサイクル”の一環であり、次の段階への過程であるとして、「サイクルの個々の行為の質が、らせん状に徐々に向上していく『学習』モデル<sup>1)</sup>」であり、このモデルにしたがって、「実習における評価を、その後の学生の学びをうながし、専門性を向上させるものと考えたい。」<sup>2)</sup>と、述べられており、明確に評価についての基本的な捉え方や養成教と教員の原則的なスタンスを示している、かつ成績評価の基準や実際の評価票様式も例示されており、とても参考になるといえる。

この保育実習指導のミニマムスタンダードは、その内容において、例えば指導担当職員（主任保育士やクラス担任保育士等）と、実習担当教員そして学生（保育実習生）の三者が話し合い、評価への共通理解を図ることは、とても大切であると記述しているが、「ここで抜け落ちている視点は、三者が対等な立場ではないということである」（開2013）<sup>3)</sup>など、評価に関する周辺部分について説明不足や未論述の箇所、また課題等も指摘されている。しかし、それでも養成校の教員にとっては、「現場と養成校が協働して保育士を育てる」という保育士養成の根本理念に基づいた、保育実習の評価についての共通認識の一つのベースであり、大きな拠りどころであることは間違いないといえよう。

本学においても他の養成校と同様であるが、保育実習における実習生に対する実習園の成績評価については、実際のところは評価のための大まかな目安や観点はあっても、厳密で詳細な共通基準がないこともあり、園によっては少し厳しいのではないかと思われるような基準を適用するところもあれば、逆の場合もあり、また同様に同じ園であっても実習生の指導担当の保育者によって、評価項目ごとの基礎的な評価に多少のバラツキが実態としてあることは否めない。しかし、それでも実習生にとっては、保育者の卵としての総合的な保育の実践力を客観的に評価されるという重要で大きな意味をもった機会であるということには変わりはない。

## 2. 研究の目的

本学の保育所（園）実習（＝保育実習Ⅰ）に参加した学生の保育実習における評価の傾向や特徴

などの実態を把握することを通して、実習指導における課題や留意点等を明らかにすることにより、今後の保育実習指導Ⅰの授業と事前事後指導及び、学生への援助の内容について一層の充実向上に繋げていくことを研究の目的としたい。

また学生の実習園による実習の成績評価と、事後指導の中で各学生が作成した実習の自己評価を比較分析し、保育現場による保育実習成績評価票（総合所見含む）での実習生の評価の実際と、各実習生の自己評価の実際から、現場の保育者が、本学の学生の保育の実践力をどのように捉えているのか、そしてまた学生はどの項目において、自分なりに保育者としての保育実践能力を十分に発揮したと考えているのかについて、さらに両者の捉え方や意識の差異等に関して考察し、実習指導Ⅰの授業はもちろん実習生に対するガイダンスや事前事後指導、また援助の内容の一層の充実、改善向上に繋げていきたいと考える。

## 3. 研究の方法

### ○対象

：保育実習Ⅰ（保育所）の参加者合計283名（過去3か年）

### ○実習時期

：平成24年9月、平成25年9月、平成26年9月

### ○研究の概要

：保育実習Ⅰの『保育実習成績評価票』（過去3か年分）を整理分析して、近年の本学学生の全体的な傾向や特徴について把握し考察を加えた。

：保育実習Ⅰの実習事後指導において各学生が記入した自己評価票（平成26年度分）の記述を整理、及び分析し考察を加えた。

：平成26年度の保育実習Ⅰに参加した各学生の実習園による成績評価と自己評価を比較分析し、本学の学生の傾向や特徴について実態を把握し考察を加えた。

## 4. 結果と考察

[1]『保育実習成績評価票』による実習園からの実習の評価について

### （1）総合評価について

保育実習を依頼した実習園に作成していただく各実習生の『保育実習成績評価票』の総合評価について、過去3か年分を整理し集約すると表1の

ようになり、それぞれの評価については、A評価が合計21人（全体＝計283人）で7.1%、B評価が同じく136人で48.1%、C評価が同じく93人で32.8%、そしてD評価が同じく24人で8.5%、という結果であった。総合評価は実習生としての保育実習全体についての評価であり、各項目の評価と直結はしていないが、密接にリンクしている。また、実習生の現時点での保育者の卵としての習熟度と今後の課題を踏まえての期待を込めての“評価”であるといえる。全国保育士養成協議会は、保育実習指導のミニマムスタンダードの中で、「総合評価の際には、項目評価を十分参照し、印象評価に陥らないよう留意する必要がある」<sup>4)</sup>と、留意点を指摘している。

保育実習の最終の成績評価は、本学においては実習園からの評価に加えて、実習担当教員が実習記録（日誌、他）の評価、及び実習レポートの評価、実習事前及び事後指導における評価等を、さらに加味して決定する事になる。その際の比率は、実習園の評価が70%で、実習担当教員の評価が30%としている。当然のことであるが、実習園からの評価を重視し、実習生の成績評価のベースとしているのである。

したがって、秀・優・良・可と、不可の5段階で最終の成績評価をつけると、実習園の総合評価がA評価の学生は秀、同じくBの学生は優、同じくC評価の学生は良、そしてD評価では可となること、実際のところほとんどであるといえる。そして、ここ3か年ではE評価の学生は皆無であるが、もし園からの総合評価がE評価であれば、最終の成績評価は不可となり、したがって保育実習Iについての単位認定はできなくなり、本学においては次年度に改めて実習への参加が必要となるのである。

＝ 表1 実習園からの総合評価 ＝

総合評価	2012年度		2013年度		2014年度	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
A= とても良い	7	6.3	3	3.7	10	10.9
B= 良い	58	52.3	47	58.0	51	56.0
C= 努力を要す	34	30.6	35	30.9	24	26.3
D= 非常に努力を要す	12	10.8	6	7.4	6	6.5
E= 不可	0	0	0	0	0	0
実習終了人数	111人		81人		91人	

※割合＝%

また、表1から実習園からの評価が過去3か年において、上位のA評価（＝とても良い）もしくはB評価（＝良い）の割合の合計が、各年度ともに60%前後であり、それぞれについては2012年度が計58.6%→2013年度計61.7%→2013年度計66.9%と、その割合が顕著に増加傾向であり、そして、逆に下位のC評価（＝努力を要す）及び、D評価（＝非常に努力を要す）の割合については、同じく2012年度が、計41.4%→2013年度計38.3%→2013年度計32.8%であり、あきらかに減少傾向が見られる。このことから、過去3か年の全体的な傾向として、徐々にではあるが、保育実習Iに参加した一人ひとりの学生の実習に対する意識及び、実習で求められる基礎的な保育実践力の向上を読みとることができる。そして、それはとりもなおさず実習担当教員を含めた本学の保育学科の全教員による、保育実習に関する学生の意識の涵養、並びに保育実践諸能力の改善向上に向けての多方面に渡る様々な意欲的かつ地道な取り組みの成果が、顕われてきていることの証左であると捉えることができよう。

## （2）項目評価と総合点について

前述のように、本学において保育実習の成績評価は、実習園からの評価と、実習担当教員による実習記録やレポート等についての評価を合せて決定するが、実習園の評価の比率が大きく、実習園の評価によってそれぞれの学生の成績評価がほぼ決まるといっても過言ではない。そして本学の学生の保育実習の評価は、具体的には実習園による項目別の評価を項目ごとに点数化しそれを合計して項目評価の総合点とし、保育実習における学生の成績評価にダイレクトに反映させている。

本学の保育実習成績評価票の評価項目は、全8項目（＝○勤務状況：出勤の状況、○勤務状況：提出物などの状況、○実習態度、○学習意欲、○子ども理解、○記録能力、○計画立案・援助、○教材準備）であり、各項目の評価は、A、B、C、D、Eの5段階としていて、総合評価と全く同じであり、実習園において該当の評価に丸をつけてもらう様式となっている。そして、評価の配分については全項目均等としていて、また各評価の点数換算の基準については、項目の評価がA評価なら10点、同じくB評価は8点、C評価は6点、そして

D評価は4点、E評価なら2点とし、全8項目の評価点数を合計して項目評価合計点とし、これを総合点としている。

### (3) 総合評価と総合点 (=項目評価合計点)

本学の学生の実習評価について、それぞれの年度の評価と総合点 (=項目評価合計点) に着目して整理分析すると、次の表2のようになる。この算出された項目評価合計点数 (=総合点) を、実習園評価とし、実習担当教員が実習担当評価として算出した点数と合せて、実習生の最終の成績評価としているのである。大まかな捉えではあるが、実習における総合評価 (※点数化は本学では評価項目だけであり、総合評価は点数化していない) が、実習生の最終の成績評価に、ほぼ直結していることを前述しているが、この表からもそれが明らかになっているといえる。

また、実習の成績評価の二極分化の傾向も次第に強まってきていることも読み取れる。つまり成績評価の良い学生は、格段に飛び抜けて良い評価であるが、逆に悪い学生は、対照的に極端に評価が悪くなってきている傾向があることがわかる。

＝ 表2 項目評価合計点 ＝

総合評価	2012年度		2013年度		2014年度	
	項目評価合計点 (=総合点)		項目評価合計点 (=総合点)		項目評価合計点 (=総合点)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
A	93.1	3.43	94.0	1.41	94.8	3.22
B	79.1	5.42	81.3	7.13	79.0	6.41
C	65.4	7.65	64.0	6.53	64.2	7.54
D	50.6	5.79	57.5	7.09	48.8	10.57
E	0	0	0	0	0	0
	111人終了		81人終了		91人終了	

※項目評価合計点 (=総合点) は100点満点に換算し算出

このことは保育実習指導の授業を行っているも日常的に実感している事であり、いわゆる一般教養の様々な教科の成績はもとより、保育実習において基本的に求められる諸能力、例えば理解力や観察力、そしてコミュニケーション能力や文章作成能力等においても多様で幅広い層の学生、つまり優れて秀でた学生はもちろんであるが、反対にそうでない学生も少なからず保育学科に入学してきている実態がある。他の養成校でもこの傾向

は同様であろうかと推測されるが、実感として、最近は特にそのような状況が強くなり一般化しつつあるように思われる。また、実際問題としてこのような学生の状況に教員としてしっかりと対応しきれていないという実情については、大きな反省点とし、保育実習指導の担当者としても、この保育実習生の実態の変化や流れ、すなわち学生の学力及び実習に必要な諸能力における二極分化傾向への対応を今後の課題の一つにしていきたい。

### [2] 自己評価票の記述について

保育実習Iに参加した学生が実習事後指導で作成した自己評価票において、実習を振り返ってみて自分自身が、「今回の実習で評価できるところ」についての実習生の記述を、評価票の評価項目ごとにカテゴリー化し整理分析すると次のような結果になった。

#### (1) ○勤務状況：出勤の状況：記述数 [合計 41] (=複数記入の記述含む、以下同じ)

- ・無遅刻無欠席で頑張った [35]
- ・遅刻をしなかった [6]
- (2) ○勤務状況：提出物などの状況：[6]
- ・実習日誌を期限内に遅れずに出した [6]
- (3) ○実習態度：[76]

- ・自分からすすんで挨拶をしっかりとした [23]
- ・いつも明るく笑顔に [22]
- ・自主的、積極的に取組み行動するようにした [9]
- ・掃除を頑張った [4]
- ・返事を元気よく大きな声で [3]
- ・指導してもらったことをすぐに実行・実践した [3]
- ・学んだことを次の日に活かした [2]
- ・最後まで頑張った [2]
- ・きびきびと行動できた [1]
- ・反省し改善に努めた [1]
- ・真面目に取り組んだ [1]
- ・一生懸命がんばった [1]
- ・毎日全力で頑張った [1]
- ・仕事はなるべく早くするようにした [1]

#### (4) ○学習意欲：[51]

- ・絵本や紙芝居の読み聞かせを頑張った [22]
- ・積極的に質問した [12]
- ・保育者の動きをよく観察した [6]
- ・ピアノをしっかりと練習した [4]
- ・先生方とコミュニケーションを十分とれた [2]

- ・絵本や紙芝居の選び方について、たくさん調べて頑張った [1]
- ・レポートをしっかりと作成 [1]
- ・実習課題にしっかりと取り組んだ [1]
- ・園歌や園の体操をしっかりと早く覚えた [1]
- ・運動会の準備をしっかりと頑張った [1]
- (5) ○子ども理解 : [91]
- ・積極的に多くの子どもと関わった [39]
- ・子どもたちと自由遊びの時等に、たくさん遊んだ [11]
- ・子どもの名前をたくさん覚えた [9]
- ・子どもに積極的に多く言葉かけし話しかけた [7]
- ・手遊びを頑張ってたくさんした [6]
- ・子どもたちの色々な性格や個性を理解しようとした [5]
- ・クラスの全員と関わり、平等に接した [4]
- ・子ども一人ひとりの発達段階を理解するように努力した [3]
- ・子どものトラブルにしっかりとコミットした [3]
- ・子ども目線で接するようにした [3]
- ・子どもたちと楽しく過ごせた [1]
- (6) ○記録能力 : [14]
- ・実習記録をしっかりと作成した [14]
- (内訳 : 夜中までかかって、宝物のようになるまで、細かい部分まで、頑張って考えて、アドバイスをたくさんもらいそれを活かして、書く量が毎日増えていった、毎日頑張って書いた、まとめ方などを自分なりに工夫して、できるだけ詳細に、気づきがたくさんあった、自由記録の部分を頑張って書いた、など)
- (7) ○計画立案・援助 : [25]
- ・設定保育をがんばった [18]
- (内訳 : 準備をしっかりととして、大きな声でゆっくりと進めた、自分でやりきった、上手くできた、など)
- ・指導案を事前にしっかりと時間をかけて作成した [4]
- ・設定保育では子どもたちがとても楽しんでくれた [2]
- ・子どもたちが楽しめるように、どうしたら良いかしっかりと考えた [1]
- (8) ○教材準備 : [3]
- ・手作りの玩具を準備した [1]
- ・布絵本を作成して用意した [1]

- ・腹話術を用意し実演した [1]

以上のような結果から、保育実習 I (保育所) の実習生は本学の評価項目の全 8 項目中における (5) ○子ども理解 : についての自己評価が最も高く (記述数 = [91])、次いで (3) ○実習態度 : (同 [76]) についての評価が高く、実習においてよく頑張ったと自分自身で良い評価と捉えていることが分かった。そして、反対に評価項目の (6) ○記録能力 : については、記述数が [14] となり、かなり少なく、学生の自己評価の中では、評価できるとした人数が 2 番目に少ない結果となった。また、評価項目 (8) ○教材準備 : については、記述数が [3] のみの結果となり、自己評価においては最も低い評価となった。これは、実習で入るクラスの子どもたちに、読み聞かせをする為に、絵本を最低でも 4 ~ 6 冊は準備して持参するように、実習事前指導において学生に徹底しているので、その点に関していえば実習のための教材準備は、ほとんどの学生が、ある程度よく出来ているはずではあるが、学生自身にとってみれば、自分で頑張ったと捉えることができる、「実習で評価できるところ」には、つまり高い自己評価には結びつかなかったからではないかと考えられる。

[ 3 ] 各学生の実習園による成績評価と自己評価の比較について

実習生の実習園による項目別の評価と、自己評価について項目ごとに比較していくと、以下のような結果になった。

●評価項目 (1) ○勤務状況 : 出勤の状況

①実習園評価 : A55% B36% C9% D0% E0%

②学生自己評価 : A82% B15% C2% D1% E0%

① 55 36 9

② 82 15 2

●評価項目 (2) ○勤務状況 : 提出物などの状況

①実習園評価 : A44% B46% C7% D1% E2%

②学生自己評価 : A71% B26% C3% D0% E0%

① 44 46 7 2

② 71 26 0

●評価項目（3）○実習態度

- ①実習園評価：A21% B48% C27% D3% E1%  
 ②学生自己評価：A19% B65% C13% D3% E0%



●評価項目（4）○学習意欲

- ①実習園評価：A16% B35% C44% D4% E1%  
 ②学生自己評価：A19% B56% C2% D1% E0%



●評価項目（5）○子ども理解

- ①実習園評価：A4% B57% C37% D1% E1%  
 ②学生自己評価：A25% B57% C16% D2% E0%



●評価項目（6）○記録能力

- ①実習園評価：A10% B44% C39% D7% E0%  
 ②学生自己評価：A16% B54% C23% D7% E0%



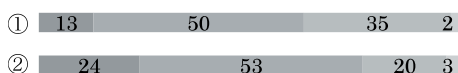
●評価項目（7）○計画立案・援助

- ①実習園評価：A6% B42% C50% D1% E1%  
 ②学生自己評価：A10% B54% C30% D2% E0%



●評価項目（8）○環境構成・教材準備

- ①実習園評価：A13% B50% C35% D2% E0%  
 ②学生自己評価：A24% B53% C20% D3% E0%



以上のような結果から、実習園評価と学生自己評価とを比較し分析検討していくと、まず全体的には学生自己評価が良い方、つまりA評価やB評価に偏っていることが読み取れ、実習園評価と比べると8つの評価項目の全てにおいて自己評価が高くなっており、いわゆる甘い自己評価になっていることがわかる。本学保育学科においては、保育実習Ⅰ（保育所）は、1年次の9月という比較的早い時期に参加することになっているので、実習に対する意識や姿勢といった部分について、どうしても十分に醸成し涵養しきれないままに実習に参加することになる学生も少なからずいて、そういった状況の中で実習生としての自己評価も主観的になってしまい、その結果、甘くなってしまう傾向にあることは否めないと考えられる。

そしてまた、評価項目の（1）○勤務状況：出勤の状況と、（2）○勤務状況：提出物などの状況の二つの項目について、両者のズレが大きいことがわかる。それについては、学生側は、自己評価で全体的に高く評価しているが、園側からすればそれほど高くは評価していない。つまり園側にすれば、勤務における出勤の状況も提出物などの状況も、基本的で問題なく出来ることが、いわば当たり前の事であり、言い換えれば出来て当然であるが故に、それほど高い評価になっていないと考えられる。

学生を助言指導し、そして評価する立場である園の職員の方々は皆、社会人であるので、こと出勤の状況や提出物に関しては、学生である実習生とは意識の在り様が大きく違い異なっているが為に、学生から見ればかなり辛口の評価になることも致し方ないといえる。その結果としてこの項目の評価に関して両者の間に大きな開きが生じているのであろうと考える。

また、評価項目の（5）○子ども理解についても、B評価については同じ割合であるが、A評価とC評価において、それぞれ20%以上の開きがあり両者のギャップが大きいことがわかる。子ども理解に関しては、実習生は園において乳幼児をよく観察する事はもちろん、一緒に遊んだり、絵本の読み聞かせをしたり、会話のキャッチボールをしたり、生活面の世話をこまめにしたり、などする中で子どもと密に関わり、そうすることを通して子どもの具体的な行動や言葉、表情や反応、そして

生活する様子等から子ども理解を深め確かなものとしていくことが求められる。実習生自己評価では、そのような子どもとの関わりを十分かつ豊かに持つことができたことと捉えており、またそれを日誌等の記録にも十分に反映できているとしていて、それ故に8割以上がAもしくはB評価となったと考えられる。しかし園側の評価の観点は、レベルが一段高く、実習生の捉える水準をさらに上げた観察や関わりや記録を求めていると考えられる。子どもを理解することは保育の出発点であり、もの言わぬ乳児や言語表現力が未熟な幼児を保育する保育者にとって、保育実践のイロハともいえるべき基本的で重要な保育行為であるといえる。

前述のように本学において保育実習Ⅰ（保育所）は、学生にとって初めて体験する実習であり、かつ1年次の9月の実施である為、乳幼児と触れ合う中で、子ども理解が深まっていくという考え方に則れば、都市化と核家族化、そして少子化が顕著な昨今の社会の状況の中で、乳幼児と触れ合う機会が減少している状況が保育を学ぶ学生にもあてはまることであるので、実習担当教員としても子ども理解についての重要性を再認識し、実習指導の授業の中でさらに乳幼児の理解に結びつき役立つ内容となるように工夫していきたいと考える。

## 5. おわりに

保育所や幼稚園をはじめ様々な法人や一般企業、そして国や自治体などの組織において実施される、いわゆる勤務評価や業績評価、また人事考課等にも共通することであるが、おしなべて人（上司や指導者等）が、人（部下や実習生等）を正しく評価することは、非常に難しいことであり、真に客観的で公正平等な評価というものは、理想や目標としては存在しても現実には不可能なことであろう。評価する側の姿勢が大切であり、とりわけ謙虚さが求められると、よく言われるが、如何にすれば理想や目標に少しでも近づけるかと、いうところに悩み迷い、そして腐心し試行錯誤している姿が、評価する立場の者の実際の様子であるといえよう。実習の評価もその内容や質に差異はあっても、根本的なところは全く同様のものであると捉えることができ、それ故に評価する側の園の指導担当者や園長のご負担やご苦労については保育所実習担当者としてしっかりと認識して、実習依頼時や実

習訪問の際等に、実習の受け入れへの感謝の意に併せ、その点についても含める様に改めて心がけたい。

また、評価者と被評価者については、一般的に上司と部下や教員と学生、そして指導担当者と実習生、といった関係から、一方的な関係になりがちであるが、本学の実習指導においては、これまでと同様に双方向性を重視しつつ、さらに両者が双方向的に応答的であることの大切さを改めてとらえ直して、かつ出来る範囲で対等性も大切にし、いふならば保育者としての先輩と後輩の様な厳しくも柔軟で優しい雰囲気も含んだ関係性の中で、学生の保育者の卵としての学びと育ちを保障するような方向性を意識して事前事後指導や授業を展開していくようにしたいと考える。

また学生一人一人の気づきや学び、そして保育者の卵としての育ちを温かく見守り、寄り添い、時には共に喜び合いながら、次のステップへ向けての課題や目標の設定にも密接に関わり、かつ実際の行動と結果に結びつけていくためのサポートが出来るような実習指導担当者を目指していきたい。換言すれば、保育者としての学びと育ちの発展的なPDCAサイクルの中で保育実習生に対して、要所において的確に関わり助言し伴走することが出来るような、実習指導担当者を目指していきたい。そしてまた、養成校における実習生の評価者として十分でないところや未熟なところについて、実習を通して実習生と実習園から多くのことを学びとる中で、評価者としての役割と責任をさらに検討し追求してかつ、自らの課題に取り組んでいきたいと考える。

また、保育実習成績評価票の総合所見欄の実習園からの実習生及び実習についての所見を、事後指導において実習生にフィードバックし活かすようにしているが、その記述から評価に関する内容を抽出し、総合評価や項目評価との相関性や整合性を分析考察することを今後の課題の一つとしたい。

保育実習における評価についての客観性を担保する最大のよりどころを「保育実習指導のミニマムスタンダード」に求めながら、本学の学生の現実の状況に寄り添って、『現場と養成校が協働して保育士を育てる』ことの内実をさらに豊かに充実したものとなるように、実習先の保育園（所）と連携しながら、評価についての検討と模索、そして試行錯誤を今後共に継続していきたい。

#### 引用文献

- 1) 全国保育士養成協議会 編「保育実習指導のミニマムスタンダード」北大路書房 2007 117 頁
- 2) 同 上 117 頁
- 3) 開 仁志 著「保育に関する実習評価についての一考察」富山国際大学子ども育成学部 紀要 第4巻 2013 111 頁
- 4) 全国保育士養成協議会 編「保育実習指導のミニマムスタンダード」北大路書房 2007 124 頁

#### 参考文献

- 1) 全国保育士養成協議会 編「保育実習指導のミニマムスタンダード」北大路書房 2007
- 2) 新保育士養成講座編纂委員会 編「保育実習－新保育士養成講座 第9巻－」全国社会福祉協議会 2011
- 3) 待井 和江・福岡 貞子 編「保育実習・教育実習」ミネルヴァ書房 1997
- 4) 石垣 恵美子 監修 島田 ミチコ 編集「実習ガイドブック」学術図書出版社 1992
- 5) 民秋 言・安藤 和彦・米谷 光弘・中西 利恵 編著「保育所実習」北大路書房 2009
- 6) 大豆生田 啓友・高杉 展・若月 芳浩 編「幼稚園実習 保育所・施設実習」ミネルヴァ書房 2012
- 7) 原 孝成 著「保育所実習における園評価と自己評価の関係」西南女学院大学 紀要 10 2006
- 8) 松本 学 著「教育実習・保育実習における学生二年間の学生評価の考察」国際学院埼玉短期大学部 紀要 29 2008
- 9) 丹羽 ヤエ子 著「保育実習における保育所評価と学生自己評価に関する考察」西九州大学短期大学部 紀要 40 2009
- 10) 無藤 隆 監修 鈴木 佐喜子・中山 正雄・師岡 章 編集「NEW 保育・教育実習テキスト」診断と治療社 2008
- 11) 山岸 道子 編著「保育所実習」ななみ書房 2007
- 12) 阿部 和子・増田 まゆみ・小櫃 智子 編「保育実習」ミネルヴァ書房 2009
- 13) 太田 光洋 編著「幼稚園・保育所・施設実習完全ガイド」ミネルヴァ書房 2012

－ 2015. 3. 27 受稿、2015. 3. 27 受理－



## A Study of evaluation of the students' learning in child care and education training I

**Hideki Hase**

Shijonawate Gakuen Junior College

The purpose of this paper, we focus on evaluation in childcare practice, analyzes the evaluation and self-evaluation of trainees from the nursery to the apprentice, by the comparative study, university students of nursery challenges in practice, also be to clarify the problems, etc., and is that it will lead to the enhancement of the content and quality of training guidance. Specifically, the discussion is to organize analyze the comprehensive evaluation and assessment of each item from the training garden for childcare training I for apprentices for the last three years in addition, also a self-evaluation by the apprentice that you created in the post-guidance Compare By considering, and to clarify the issues and problems in the training of university students, it is possible to explore the direction and perspective on efforts to improve child care practice ability, thus teaching of childcare training guidance I and, pre and post and lead to improvement improvement and further enhancement of leadership, even is to contribute to that explore the better way.

**Key words:** child care and education training II, Learn, instruct it after a problem, true taking lessons, look back a seat